

天地

ネットワーク テーブル 480号

天地シニアネットワーク 2018.

10.1

T E N T I T O D A Y			1
会員の広場	「仙台で・臺一郎」		2
連載作品			2
随 想	天のわざ、地のほまれー地球を測れ、宇宙を測れ 55. 特殊相対性理論	伊那 闊歩	2
随 想	随筆風「1950年代の僕と街」(17) 進駐軍の時代、そして在日米軍の時代	臺 一郎	5
記 録	ブドウ栽培奮闘記(2)	森永 善彦	8
旅行記	そうだ京へ行こう・古刹の花物語(53) 洛中の春 京都御前 御苑	大竹 漢洲	9
回 想	“思えば遠くへ来たもの”(4) 広島カープが日本一になった昭和50年ころの広島	津田 孚人	11
講演会	「奈良興福寺文化講座」「新三木会」		13
事務局			14

T E N T I T O D A Y

強烈な台風24号が日本列島を縦断、各地に被害をもたらしました。自然災害ですからやむを得ない面があります。多種類の、例のないような規模、質の災害には、事前に対処できません。事後対応も自治体では無理です。国レベルの防災専門部門を立ち上げ、国民を安心させてほしいものです。

一方のトランプ旋風、世界中に吹き荒れ、貿易戦争が始まりそうです。日本も当然それに巻き込まれていくのでしょうか、国民生活にどのような影響がでるのか心配です。政府は、企業中心の対応に追われているようです。国内向けに憲法改正、消費税アップなどを言っていますが、貿易戦争と関係があるのでしょうか。国民の関心とかけ離れているようです。国民の我慢にも限界があります。

株価は、ニューヨークが高く、日本市場も連れ高しているようです。アメリカの景気は、金融操作である程度コントロールされていますが、日本は、日銀の機能硬直で、コントロールが難しそうです。関税競争に対応不能で、不況、不景気とならないと良いのですが

会員の広場

仙台に行き、森永君に会い昔話や天地シニアの話をしてきました。翌日は多賀城市の8世紀国府の史跡や最近出来た歴史博物館を訪ね、その翌日は南三陸町に行ってきました。津波によりわずか10分で徹底的に破壊され流失した町の中心部は、震災から7年を経た現在、瓦礫こそありませんが、そこそこで新たな防潮堤や河川の護岸や道路整備の工事が未だ行われていました。(臺 一郎)

連載

天のわざ、地のほまれ —地球を測れ、宇宙をはかれ—

伊那 闊歩

55. 特殊相対性理論

サイエンスに関する仕事にたずさわっていて、西暦1905年がどのような年であったか知らない人たちはいないと思われる。そう、あのアルベルト・アインシュタイン(1879-1955)(*1)が「特殊相対性理論」を発表した年なのである。それだけではない！この年アインシュタインは、このほかたてつづけに2編、つまり、「光量子理論」と「ブラウン運動の理論」とを発表したのだ。

驚いたことにこの3篇の論文は、お互いに深く関連しているわけではなく、それぞれ独立の理論に基づくものであるが、それらがすべてノーベル賞に値する第一級の研究論文なのである。通常ならば、3人の研究者から別々に提出されて然るべきものを、アインシュタインはたったひとりで、しかも数カ月のうちに完成したのだ。このうち「特殊相対性理論」は特に有名であるから、この論文によってアインシュタインにノーベル賞が授与されたかと早合点しがちであるが、じつは、ノーベル賞授与の対象となったのは「光量子理論」の論文なのだ。1905年は、アインシュタインにとっても物理学発展の史的な重要性においても記念すべき奇跡の年「Annus Mirabilis」(ラテン語)なのである。

では、これらの論文のうち「特殊相対性理論」の内容がどんなものであるか、少し見てみよう。その詳細については次回から検討し述べて行きたい。「特殊」という接頭辞がついているのは、もちろん「一般相対性理論」があるためなのだ。どちらも時間空間の構造に関する理論であるが、前者は加速されていない(慣性)座標系での物理法則の理論、後者は加速されている座標系、そして重力場の中での理論(1915年完成)である。

まず、真空中での光速不変の法則について。光の真空中でのスピードは、

秒速約 30 万キロメートルであるが、自分のそばを通過した光線をただちに、光のそれに近いスピードで追いかけたとしたら、自分の前方にのろのろ走る光をみることができるのであろうか？また、光と同じスピードで光と並行して走ったとしたら、静止した光を見ることができるのか？と考えてみる。アインシュタインの答えはどちらも「ノー！」である。

つまり、光をいくらスピードあげて追いかけても、光はつねに自分との速度差 30 万キロ/秒 を保って逃げていくのだ。これが光速不変の法則なのである。そして、追いかける自分が光と同じスピードを出すことは原理的に不可能、光と並んで走ることに、さらに光のスピードを超えることも決してできないのだ。アインシュタインは、この光速不変の原理を前提条件として、世にも不思議な理論をつくりあげた。それが「特殊相対性理論」である。

特殊相対性理論が成り立てば、真空中での光速は不変であることが帰結するが、同時にこれまでの常識に反する奇怪な現象、たとえば、運動する物体が縮んで見え、時間がゆっくり進む・・・というような事が起きることがわかる。ロシア生まれの数学者ヘルマン・ミンコフスキー(1864-1909)は、相対論の枠組みを定めるミンコフスキー時空を導入し、オランダの物理学者ヘンドリック・ローレンツ(1853-1928)も、アインシュタインに先立ってローレンツ変換の公式を導きながら、特殊相対論の本質を把握できなかったのだ。

アインシュタインは、確固たる自信があったに違いない。なぜなら、特殊相対論定式化(数式として表現すること)の骨子と見做されるローレンツ変換が、電磁気の基本方程式(マクスウェル方程式)の形を不変に保つのであるから。それぞれの慣性系で電磁気の方程式の形が異なるならば、それぞれ異なった電磁気現象が起き、困ったことになる。ところが特殊相対論の枠内でのみ、電磁気の基本方程式の形は不変に保たれるのである。結果として考えられる奇怪な現象は、むしろ枝葉末節なことながら、すべてこの世において起こりうるのだ。「特殊相対論」が奇妙な理論だと思われるのは、人間の感性が理性に追いつかないことにほかならない。

とくに物質の質量(m)と全エネルギー(E)とは等価であるとの公式(cは光のスピード)：

$$E = mc^2$$

は、「特殊相対論」の栄えある成果として最高の価値ある公式のひとつで、これまでの自然観に加えられた衝撃的なパンチであった。あまりにも有名なこの公式は、次のようにも解釈することができる：宇宙をエネルギーの充満する大海と見れば、銀河はその中に浮遊する氷山のようなものである。つまり、エネルギーの一部が「凍結」して、それが形をなして物質となり空間に浮遊していると考えられるのだ。極低温(マイナス 270℃)の宇宙(という大海)の中で余分なエネルギーが凍結し、析出して出てきたものがすなわち物質なのだ(*2)。

アインシュタインは、いったいどのような研究環境において、これら先駆的な発見を為し得たのかぜひ知りたいと思い、スイスの「アインシュタイン・ハウス」に行ってみた。それは(ゲーテも感嘆した)ベルンで最も美しい街路クラム通り 49 番地にあった。噴水や時計塔などによって装飾されたメイ

ンストリートの両側に設けられた歩道は、降雪に備えてであろうか堅固なアーケードになっており、歩道に面して色とりどりのショーウィンドウが並んでいる。

アーケードの中ほどに「Einstein Haus」と書かれた看板がかかって、間口の狭い建物に小さな入口がついている。一階部分は最近まで喫茶店だったらしいが、現在は廃業してその店のカウンターにアインシュタインの著書が展示されている。二階と三階の部屋はこじんまりしていて、これでは家具調度を置けば、本棚のスペースが十分とれないぞ！しかも、この2DKほどの広さの三階部分でアインシュタインはミレーヴァ夫人と新婚生活を過ごしたのだ。早い話、アインシュタインは1903年秋から、チューリヒに移る1909年秋まで6年間、ベルンの商店街の真ん中に住んでいたのである。

公開されているのは、2階と3階の4部屋で、観光客のために食器戸棚、カーペットの上にダイニングテーブル、暖炉、かけ時計などが美しく整えられている。デスクと一体になった本棚、寝椅子（ディヴァン）。そしてレースのキャノピー（天蓋）のついた揺りかごは、長男ハンスがうまれて幸せの絶頂にある家庭を目のあたりに思い浮かべさせてくれる。一隅に頑丈な三脚のついた書架があり、アインシュタインはこれを使って、立って本をよみ、立ったまま計算し、ここで論文を書いていたらしい。この書架にかがみこみ、もたれるアインシュタインの写真が残されている。

アインシュタインは、ETH(*3)を受験して失敗し（試験問題のレベルが低すぎた？）、一年浪人した後、入学を許されたのであった。ETHの卒業証書が、成績表とともに壁に展示されていた。それには美しいドイツ語のキャリアグラフィー（飾り文字）によって次のように記されている：

<p>Hiermit wird bescheinigt, dass Herr Albert Einstein von Ulm, Deutschland unterm 2 August 1900, das Diplom der eidg.polytechnischen Schule als Fachlehrer in mathemat Richtung erhalten hat. Tuerich, den 2 August 1900</p>
--

ドイツ国ウルム出身のアルベルト・アインシュタイン氏は、1900年8月2日、数学の専門家（教師）として、連邦工科大学の学位を取得したことをここに証する。チューリヒ、1900年8月2日、

証書の最後の部分（省略した）には大学名、いちばん下のスペースには学長のサインが記されている。大学での成績は数学以外そこそこであったようだ。

1904年、ベルン特許庁に3級技術専門職（特許審査官）として勤務しながら、長男ハンスが誕生し身辺繁忙をきわめたこの時期、アインシュタインは自然現象にたいする天性の優れた感性のおもむくままに、精力的に研究を深めていくのである。それはとても人間業とは思えない。アインシュタインは言う「わたしは天才ではありません。ただ、人より長くひとつのこととつき合ってきただけです」、この時期かれは、生まれたばかりの乳児をあやしながら（坊やのオシメとりかえてねッ、アルベルト！）、少なくとも物理学の3つの課題とつきあい闘っていたのだ。

そもそも天才とはなにか？ 最近、マルコム・グラッドウエルの著書「天才、成功する人々の法則」（勝間和代訳、講談社）に、天才と呼ばれる人々の成功の秘密について具体的に書かれているのを読んだ。たとえば、通常ピアニストやヴァイオリニストなどプロのソリストが天才として名をなすのは、例外なく圧倒的に多くの練習によって努力を重ねてきた結果なのだという。生まれながらの天才は存在しないのだと！では、どれくらいの時間たゆまぬ訓練を重ねたのか？ おおくの分野での専門家の見解はほぼ一致していて、それは 10,000 時間なのだそうです。もちろん、この条件さえ満たせば、だれでも一流になれるかという、それは違う。良い教師にめぐまれるとか、運勢のようなものも成功の大きな要素として考慮されなければなるまい。

アインシュタインはどれくらい思考のために時間を費やしたのであろう。理論物理学のような分野においては、思考を深めるために集中力を継続させることが不可欠なのであるが、その原動力はどうやら旺盛な好奇心であるらしい。アインシュタインは言う「わたしには、特殊な才能はありません。ただ、熱狂的な好奇心があるだけです」、さらに「大切なのは、疑問を持ち続けること、神聖な好奇心を失ってはいけません」。これらは「アインシュタイン 150 の言葉」（J. メイヤー、J. P. ホームズ編、ディスカヴァー 21）として出版されている。ゲーテは言う「ドイツ人は、そしてドイツ人だけではないが、学問を近寄りがたいものにする才能をもっている」（箴言と省察）と。

(*1)アインシュタインのファーストネームはアルベルトだが、米国に渡って以後は、いろいろな出版物には米国式にアルバートと記されることが多い。

(*2)凍結しているのであるから、これを解凍することが出来る。ウラン（プルトニウム）という物質のほんの一部を解凍した結果が、広島（長崎）に投下された原爆の惨禍なのであった。

(*3)ETH : Eidgenössische Polytechnische Hochschule スイス連邦工科大学。ドイツ語でエーテハーという。ホッホシューレ（英語でハイスクール）はスイスでは単科（今の場合、工学部だけの）大学を意味する。

随筆風「1950年代の僕と街」（17）

臺 一郎

進駐軍の時代、そして在日米軍の時代

昭和 20 年 8 月、第二次大戦の終戦により米国のマッカーサー元帥率いる連合軍が日本本土に上陸した。以来約 6 年間に渡り、連合軍は進駐軍となって日本各地に駐留した。その規模は終戦の昭和 20 年には米英豪など各国合わせて 40 万人に達したが、翌 21 年には 20 万人台に、22 年には 12 万人まで減少した。さらに昭和 26 年にサンフランシスコ講和条約が調印され、翌 27 年 4 月にそれが発効して日本の主権と独立が回復したことで、米軍を除く連合軍は大半が撤退していった。但し、日米安保条約に基づき、米軍のみは引き続き 10 万人規模が駐留した。その後米軍も漸減して、昭和 30 年代後半には 5 万人前後が全国各地の基地に駐留、名称も進駐軍から在日米軍

へと変わった。

連合軍が進駐していた時代、連合軍総司令部＝GHQ の要請に基づき、東京や横浜、名古屋や大阪などの大都市部では、旧華族や財閥家などの豪邸が連合軍の上級幹部や軍属用の住宅として接收された。特に東京の皇居から車で 45 分以内で行ける旧華族の邸宅などは、華族制度の廃止を確実なものとするためもあって、殆どが接收されたという。これら接收住宅に入居した米軍将校の中には、祖国に帰れば決して住むことの出来ないような豪壮な邸宅に日本人のメイドつきで暮らせたわけだから、日本での滞在経験・生活体験は忘れがたいものとなったに違いない。

おりしも円の対ドルレートは 1 ドルが 360 円の固定相場である。つまり 100 米ドルは日本円だと 36,000 円にもなった。ちなみに昭和 30 年の 36,000 円を、消費者物価指数をデフレーターにして現在の貨幣価値に換算すると 20 万円近くになる。だから、決して高くはないと言われた駐留軍兵士の給与でも、一部を日本円に交換して基地周辺や専用住宅近くの商店で使えば相当に使い出があっただろう。大袈裟に言えば、日本に駐留し暮らした数年間は、少なからぬ駐留軍人と家族にとって、祖国ではなかなか味わえない贅沢な暮らしとなった筈だ。

その当時、僕の母方の実家は、現在の東急目黒線の洗足駅から歩いて 10 分ほどの住宅地にあった。実家の周辺でも、門から玄関先まで車で乗り入れられるような豪壮な屋敷は、しばしば米軍幹部や軍属用住宅として接收されていた。それらの接收住宅は門の脇に小さな歩哨小屋が設置され、制服を着た門衛が立っており、近隣住民といえども門を通過して勝手に敷地内に入り込もうとすれば確実に誰何された。あまり確かな記憶ではないが、洗足駅から母の実家までのルート沿いにそういう門衛付きの接收住宅があって、子供心に「あの家はなんで門の脇に番兵みたいな人が立っているのだろう」といぶかった記憶がある。

都内では米軍の中級クラスの軍人と家族のためのニュータウンも開発された。もっとも有名なのがワシントンハイツだ。戦前の日本陸軍の練兵場の跡地で、現在の代々木公園やオリンピックプール、NHK 放送センター等を含む一帯である。敷地総面積は 92 万平米と広大だ。坪にすると 30 万坪近い。駐留軍人とその家族が暮らすための 800 戸を超える住宅、そして学校、教会、劇場、商店、体育館、将校クラブなどがゆとりを持って配置され、まさに米国の新しい街＝ニュータウンであった。この街は敷地の外周がぐるりとフェンスで囲われていて、そこに暮らす米軍人とその家族、そしてハイツ内の商業施設やサービス施設で働く日本人以外は、みだりに立ち入ることが出来なかった。そして日本の法律さえも適用されない治外法権の世界であった。

フェンスの手前はまだ終戦時の無秩序と混乱の残滓が残り、小さな住宅が密集する、お世辞にもゆったり、整然とは言えない日本の住宅街だった。それに対してフェンスの向こう側は、丁寧に刈り込まれ、手入れの行き届いた緑の芝生が一面に広がる公園のような贅沢な空間に、平屋主体の新築戸建て

住宅（米軍用語では DH=ディペンデント・ハウス）や集合住宅が間隔をあけてゆったりと建ち並んでいた。住宅地を周回し或いは貫く 2 車線の舗装道路には、ハイツの住民が運転する大型のアメ車や子供達が乗る自転車が走り、歩道にはカラフルな服装で犬を散歩する住民の姿があった。遊具の完備した児童公園、野球場やフットボールのためのグラウンド、バスケットボール用のコート、米軍人専用の PX というスーパー、映画館などもあって、フェンスの中は、空気の匂いや風の感触までもが違っていそうな異質で異次元な世界だった。

当時は、山の手線で渋谷から原宿に向かうと、左手の車窓から芝生の中に点在するワシントンハイツの瀟洒な住宅群がつかの間だけ見えて、幼い子供心にも自分達が暮らす世界とはまるで違う世界だなと感じた記憶がある。しかし 1961 年、3 年後に開催される東京オリンピックの選手村としてワシントンハイツの転用が決まったため我が国に返還されることとなり、ハイツの住民は、調布飛行場の隣接地に建設された新たな居住地「関東村」へと移っていった。

ところで僕は中学から中央線の国立市（当時は国立町）にある中高一貫の桐朋学園という私立校に通ったが、当時の国立町は周囲に立川、府中、横田、ジョンソンなどの米軍基地がいくつもあった。そのせいで、国立の町内には通称米軍ハウスと言われる戸建ての賃貸住宅がところどころに建っていた。例えば僕が桐朋中学に入学した昭和 34 年頃、国立駅の南口からまっすぐ伸びる大学通りを南下し、一橋大学の敷地を過ぎた辺りにも数軒の米軍ハウスがあったと記憶している。こうした米軍ハウスは立川市、昭島市、日野市、府中市、福生市、入間町など北多摩地区や近隣の埼玉県内の市町村にも多数散在し、米国の軍人や軍属が家族で暮らしていた。

ちなみに平均的な米軍ハウスは、平屋づくりで玄関ドアの外側に蚊やハエの侵入を防ぐ網戸がつき、靴を脱がずに家に出入りする欧米人用の住宅らしく玄関ドアを開けるといきなりリビングルームという間取りだったようだ。リビングや寝室の灯りも蛍光灯ではなくて白熱球の電灯で、窓には日本国内ではまだ殆ど普及していなかったエアコンが取り付けられていた。ランプシェイドの付いた白熱球の電灯は、夜それが灯ると温かみのあるオレンジ色の光が部屋を満たし、柔らかな雰囲気周囲に放っていた。また敷地の一角には必ず駐車スペースがあって、ナンバープレートに Y だの S といったアルファベットのついたアメ車がとまっていた。家の外板は白やブルーのペンキが塗られていて、豪華な感じはなく、広さ的にも屋敷と言えるほどの住宅ではなかったが、日本人の住宅とはちょっと違うバタ臭いオーラを放つ住宅だった。

改めて言うまでもなく、我が国にとって在日米軍のもっとも重要な役割や存在価値は、憲法上の制約から正規の軍隊を持たない我が国の平和と安全を、同盟国軍として背後から、時には正面に出て守ることにあった。でもそのほかにも地味ではあるが、普通の日本人が米国社会を実感的に感じる或いは知るといふ効果もあった筈だ。例えば、個人旅行であれ出張であれ、平均的な日本人が米国に行くことなどまだ想像もできなかった昭和 20 年代や 30 年代

前半に、僕達が垣間見ることの出来た進駐軍や在日米軍人の日常生活や居住環境、すなわち住宅、家財、街路、ファッション、遊びなどは、普通の日本人が米国社会の圧倒的な豊かさや先進性を多少なりとも実感として認識する上で、格好のショーケースとしての役割や効果を果たしたと思う。

ブドウ栽培奮闘記（２） 森永善彦

第1回でブドウ作りを目指した理由、作る品種の決め方、栽培する場所、苗の入手等についてお話ししました。

置く場所は1階の和室の外の屋根の付いたウッドデッキにしたと1回目の記事でお話ししました。

実はこの和室の夏の日除けには苦労していて、ゴーヤを植えたり、日除けのシートを張ったりしていましたが、何れも思うような効果が現れず悩んでいました。

しかしブドウの葉は夏に大きく密生して繁り、秋になると枯れて散るので夏の日除けに持って来いで、しかも冬は充分日差しを和室に通してくれそうなので1石2鳥の役割を果たしてくれる事になりました。

さてプランターで仮植えして越冬させたブドウの苗木をいよいよ2015年の春3月にプランターに入れた土にしっかり縦に植え込みました。

プランターは直径60センチ深さ32センチと割と大きな物だったので、30センチの苗木を植えこむと、土から上は20センチしか苗木が顔を出していない状態で、これが本当に大きく育つのかと心もとなく思いました。

兎も角植物を育てるのに大事なことは毎日の水遣りだと本に書いてあったので、春から夏に掛けて日差しがどんどん強くなる中で、せっせと毎日水遣りを行いました。

暫くすると枯れ枝の様だった苗木から幾つも葉の元になる芽が出て来ました。発芽です。

その芽がどんどん育って7月頃には一つ一つの芽が大きな葉に育ち始めました。また苗木もどんどん大きく伸び始め葉も沢山繁り始めました。

1年目は苗を大きく伸ばし沢山の葉を繁らす事が大事なのです。

こまめな水遣りの甲斐があり、秋には大きな葉を何十枚も繁らせた3メートル以上の立派な若木に成長し、ウッドデッキの屋根の下に吊り下げた棚に届きました。

（棚は廃物利用で、キュウリやトマトを栽培した時に使った樹脂製の支柱を組み合わせて屋根の下に針金で吊り下げました）

1年目の成長はここまでです。まだ実は生りません。

秋になると葉がオレンジ色に紅葉し12月には全て落葉します。

ここで来年に向けた仕事が1つあります。

葉が全て落ちた所で木の剪定をしなければなりません。

剪定をする事により次年度木が更に元気に成長すると本に書いてありました。

折角成長した木を切るのは何と無く忍びなかったのですが、本に書いてある通り半分に切りました。

本当に2年目に大きく成長するのか不安でしたが、2年目の成長を待つ事にしました。

今回はここまでにします。

2年目には実が収穫出来るのですがその話は次回詳しく致します。

<そうだ京へ行こう・古刹の花物語> (52)

大竹漢洲

洛中の春 10・京都御前 御苑

京都駅を発車したJR嵯峨野線(山陰線)の電車が、間もなく右手に大きくカーブして北上するように走行し、二条城駅で、西に方向を変えて嵯峨野、福知山に向かいます。京都御所の話に、突然JR嵯峨野線で始まり、驚かれた方もおられるかも知れませんが、京都御所を話す上で大切な鉄道路線がJR嵯峨野線です。

770年に桓武天皇が、長岡京から平安京(葛野・愛宕)に遷都しました。新しい皇城の中心となる朱雀大路が、実は北上するJR嵯峨野線上であり、内裏中心の大極殿は、千本丸太町通の交差点付近に位置していました。今の御所の位置とは全く異なり、西に8km移動しています。

関東人は、京都市地図に疎い方が多くおられますが、大極殿のあった交差点の更に北は「北野天満宮」「平野神社」です。道幅84mの朱雀大路の北に朱雀門、南に羅城門が、七条左右に東市・西市、九条に東寺・西寺があり、平安京は唐代・長安の都城の1/4の面積のある都でした。

道幅84mの朱雀大路は一直線に、3.8km先の大内裏まで伸びています。大路の面した各条第一坊には、高くそびえる築地塀が設けられています。しかも有力貴族(公卿)といえども、大路に面した側に門を造ることはできませんでした。朱雀大路を歩く人々は、恰も両側に長い壁が続いたように感じたでしょう。長安の都城の周囲は、高い石造りの城壁で囲まれていましたが、平安京は築地塀でした。日本の御所は、中国の皇城に比べて外敵の恐れが無かったに違いありません。

長々と平安京の概説を語る積りはありませんでしたが、小さなことに気に掛かる性分です。それではかつて御所が、現在の京都御所に動座したのは何時?で、何故?か、という疑問が残ります。御所の御苑の旧近衛家邸跡は、桜の名所です。美しい桜を愛でる前に疑問を氷解させたいと思います。

鴨長明の『方丈記』に京都の五大災難が書かれています。京都は歴史的に地震、大風(台風・竜巻)、大火、洪水、飢饉に常に見舞われ続けた災害都市でした。災害が発生する度に、激しい人口の減少が起こり、一時は2万人にまで減った時期もありました。

日本国は世界一の地震国です。江戸初期までに文献資料に書き留められた地震数は、2700回以上にも達しています。平安京も過去に幾度も大地震に見舞われました。その都度、大内裏も大きな損害を受けたことは言うまでもありません。

11世紀前半までは内裏が、焼失すると直ぐに再建されてきました。しかし後半になるとなかなか再建されなくなり、内裏を離れた里内裏居住が常態

化していきました。この中で、治暦4年（1068年）から後三条天皇による内裏と大極殿の再建が関白家藤原氏の支援で行われ、保元2年（1158年）から3年までの後白河天皇治世下の内裏再建と大内裏修造は、平家一門の資金援助で行われています。

この再建と修造には、天皇家にある目論見がありました。天皇即位の儀式を控えて、余りにも朽ち果ててみすぼらしい大内裏（八省院正面門）の正面を荘厳化して、外面の見栄えに威厳を持たす意図がありました。天皇の即位儀式を荘厳にする目的です。

その後、大内裏は、安元2年（1176年）の大地震で被害を受けた上、翌年の大火で更に大きな損傷を受けました。これ以後、大内裏の土地に八省院（中務・式部・治部・民部・兵部・刑部・大蔵・宮内の省＝中央官庁）は再建されませんでした。焼け残った内裏も承久元年（1218年）に焼失、その後再建に向いましたが、途上の安貞元年（1227年）に、火災に見舞われて殿舎・諸門ことごとく灰燼に帰して廃絶されました。これを契機にして内裏域の衰微は加速され、ついに内裏は内野と呼ばれる荒廃した野原に化してしまいました。794年に平安京に遷都が行われてから430余年で、正式な内裏は失われたことになりました。その後、内裏は大極殿に再建されません。天皇は里内裏を転々と動座しています。

里内裏とは平安京内裏の外に臨時に設けられた皇居を指します。多くは摂政・関白家などの外戚の家を充てました。里内（さとだい）、今内裏とも言いまします。尚、外戚（げしやくとも読む）は母方の親類です。

鎌倉中期には、王朝貴族の遊覧の地嵯峨野の大寺院（大覚寺）が里内裏の役割を果たしています。室町時代に入り、将軍家足利氏が造営した北小路室町の新邸に動座しています。この新邸が造営された地所は、鎌倉時代に名家・西園寺公経邸など、権勢を誇った西園寺家諸流の貴族邸宅が集まっていた処であり、しかも室町家（四辻家）と菊亭家（今出川家）の近隣であった由緒ある地域でした。南北朝期には、崇光上皇も菊亭を里内裏とし、後には室町邸にも動座しています。

後に両邸宅跡を義満は入手して新邸を建てています。四季おりおりの花が植えられ、公家の愛蔵された玉銘木が集められました。そのため義満の新邸は「花の御前」とか「室町殿」とか呼ばれるようになりました。

公家とは本来、天皇や朝廷の意味でしたが、この頃から貴族の意味でも使われていました。里内裏であった土地に「花の御所」を造営した足利義満が「室町殿」と呼ばれたことは、足利将軍家の権勢が天皇家を上回っていたことを意味します。この後、益々天皇家は形骸化していきました。天皇家の主たる業務は征夷大將軍の宣下と太陰曆製作販売でした。ここ北小路室町に、将軍御所が置かれたのは偶然ではなく、近隣に里内裏・土御門東洞院殿が存在していたことによります。鎌倉中期の正元元年（1259年）に閑院内裏が焼失して以降、内裏は転々と動座することになりました。

南北朝期を迎えてから、新造された土御門東洞院殿に固定されることになりました。しかも明德3年（1392年）に南朝から引き渡された「三種の神器」が、この里内裏に移されます。所が応永8年（1401年）の出火で、土

御門東洞院殿が炎上しました。翌年には跡地の規模が一町四方に拡大され、新しく内裏が造営されて以降、明治維新に江戸城に動座するまで、現在の京都御所が天皇の皇居となりました。

内裏が移動した背景を調べるのに意外に時間がかかりました。天皇家は、洛中洛外を460余年に亘って彷徨が続き、時の権力者の力や天変地異の力等と色々な原因があったでしょうが、この彷徨は、大天狗・崇徳院の怨霊の祟りとしか考えられません。明治維新に逸早く東京に動座したのも深い意味合いが在ったのではないのでしょうか？天皇家の人々が京都に行幸したとはあまり聞きません。思い過ごしでしょうか？

今出川通に面した京都御所北側に広大な緑地（この緑地が京都御苑）があります。この緑地は、もともと宮家や公家の居任地のあった処です。明治維新に天皇が東京に動座したことで、天皇家と共に宮家や公家も京都を離れました。この居任地もまもなく荒廃してしまいます。この有様を目にした明治天皇は、旧屋敷の撤去、石垣工事、苑内道路整備、植樹を命じました。その結果として、御苑の北側に植えられた多くの桜樹が春を迎えると、枝いっぱい色とりどりの桜花が咲き、市民や観光客の憩いの場になりました。

御苑で好んで訪れる処は、近衛邸の跡地です。緑地一面に数々の種類の桜樹が植えられ見事の一言です。北の今出川御門から入り、西の乾門を抜ける一帯です。子供連れの市民が大勢、思い思いに春の日差しを浴びて、桜の花を楽しんでいます。

“思えば遠くへ来たもの”（4） 津田孚人

広島カープが日本一になった昭和50年ころの広島

9月26日（水）に広島カープは3年連続9度目のリーグ優勝を決めました。1984年以来4度目の日本一を目指すこととなります。現在、紹介中の昭和50年は、広島カープが初めて日本一になった年、因縁みたいのものを感じます。当時は、山本浩二、衣笠祥雄が中心に座り、投手陣は、津田投手が健在でした。赤ヘルは存在していましたが、最近のような球場全体を赤ヘルで埋めるという状況にはなっていませんでした。若い女子が多くスマートな応援に、往年のファンは皆ビックリしています。

赴任した49年3月の広島には、まだ新幹線が来ておらず、駅周辺は未開発で寂しく、一般の人は寄り付かないところでした。市内には戦争の爪痕も残り、繁華街も札幌や博多に比べるとずっと小さいものでした。

それでも、仕事で担当した広島、岡山、島根、鳥取の4県では、人口も経済力も広島が圧倒的でした。したがって広島での仕事を中心となりました。広島駐在としては、法人保険を担当する二人が一緒にいましたが、財務担当として一人でもっぱら単独行動、好きなように動いていました。

一橋には、如水会という強力なOB会が各地にあります。地元企業の有力OBが多いので、転勤者はだいたいその地の支部に入ります。当時の広島支部は、広島銀行の専務が世話役で、地元の方も多いので月1回の例会には成るべく出ました。地方銀行は、その地方では強い力を持っています。地場の企業と接する時には有効ですから、専務の名前をそれとなく使わせてもらい

ましたが、一方で、見返りも差し上げました。

第一生命が保有する広島の上場企業の配当金が、都市銀行の口座に入っていたのを全部、広島銀行の東京支店の口座に入るように、本社に話して変えてもらったのです。中国電力、東洋工業（現マツダ）などの配当金は結構大きく、広島銀行の配当金ですら都市銀行に入っていましたので、銀行のメリットは大きかったはずですが、恐らく広島銀行は、他の生保とも同じような状況にあったはずですから、きっと同様の要請をしたでしょう。銀行株の買い増しもしましたから、専務さんのお名前拝借料、十分返したと思っています。

さて企業の大小に拘らず、財務取引をする場合できるだけトップに会い、その人柄を知っておくというのは、今でも大原則だと思います。高度成長期、大企業相手では、課長にもならない若い担当者が、トップに会うことはなかなか難しいことでした。そこで株主総会に出席することにしました。当時の総会は、どこでもいかに短く切り上げるかを競っていましたから、経営者の顔を見るのは瞬時、社員株主が多く出席し、一般株主の質問はなくあっという間に終わりました。

そんな時に、広島相互銀行（現在は？）の総会で、一般株主から、当時問題になっていた国民協会（？）への献金について質問が出たことがありました。総会は、はっと凍り付きましたが、一人の株主が立ち上がり、関係のない話を延々と始めました。10分もしないうちに、会場に一人の男性が現れ「待った、待った」と声をかけ、話を受け取って素早く終わらせました。当時有名だった広島出身総会屋のように見受けられましたが、察するに同時に行われていた他の会社の総会（広島銀行？）から、駆けつけたようです。

総会日の朝、銀行の裏通りに、東京ナンバーの外車が何台も止めてあったのを思い出します。

総会といえば、地元財界が立ち上げた非上場の会社の総会も出ました。事務局は、何という顔をしていましたが、各社とも社長か専務がでますので、新聞でしかみないトップの顔を知るには絶好でした。雰囲気、仲の良さ、悪さが感じられ貴重な情報を得たことがありました。

広島勤務もわずか二年でしたので、東京本社へ戻ってからも長くお付き合いしたのは（株）いずみの当時の高西経理部長さんくらいですが、中国電力の財務担当の常務さんも、後年、毎年上京して生保各社を集めての協調融資説明会で、かならず広島でゴルフを一緒にしたお話を披露してくれるので困りました。

広島にいたころの広島の生保業界は、日本生命が圧倒的で支社を二つ構え、後に社長になる伊藤支社長がおられた。如水会の先輩でしたが第一生命の後輩など無視していた。それが、中国電力は日本生命が生保メインで、伊藤さんは日生財務のトップとして協調融資の説明会に出席しますが、借りる側の電力の常務は、第一とのゴルフ会の話ばかり困りました。

そして、51年3月、広島支社長が転勤するときに、一緒に転勤することになりました。駐在室の法人保険の担当も一緒に転勤でしたので、3人一緒に転勤となりました。この回想の初めに、野村證券の広島支店長が転勤するときに、見送りが多いのにショックを受け、自社の広島支社長が転勤するときには見送りが野村の支店長

と同じくらいにというのを目標にする、と当時決意したと書きました。3人一緒だったせいか、野村證券の支店長同様とはいきませんでした。自社以外の地元の方も多く来てくださり、二年間の成果としては十分と一応満足していました。

ただ、個人的には、その一月ほど前に、課長で本社へ戻るよ、と言われていたのですが、発令は課長一步前の課次長で意外でした。赴任前に、債券、融資と、他人にない実績を残していましたが意外でしたが、世の中には、裏に見えない敵がいるんだなというのを知り、あまり気にせず本社に戻りました。性格的に争うのが嫌いだったせいかもしれません。その後も、2度、言われたことと違う経験をしましたが、誰に愚痴をいうこともなく過ごしてきました。今になると、語りたくなりますが。

文化講座・講演会

第99回 新三木会 講演会のご案内

- 1、日時・会場 2018年10月18日(木) 13:00-15:00
如水会館 2F スター・ホール
- 2 『人工知能(AI)研究の現状とこれから』
杉山 将氏 理化学研究所革新知能統合研究センター長
東京大学大学院教授(新領域創成科学研究科)
3. 申込・会費 E/Mail: shinsanmokukai@gmail.com
TEL :047-464-4063
フルネーム:一般・天地シニアネットワークと伝えてください
- 4、会費:2000円 婦人1000円 学生無料
茶話会:15:15-14:20 千円(自由参加)
5. ホームページ
<http://jfn.josuikai.net/circle/shinsanmokukai/>
- 6 今後の予定

第100回 11月15日(木) 『歴史と現代』 仮題 一橋講堂
山内 昌之氏 東京大学名誉教授・武蔵野大学特任教授

第101回 12月20日(木) 『IT社会と日本経済』 仮題

野口 悠紀雄氏 一橋大学名誉教授

奈良興福寺文化講座 2018年10月25日(木曜日)

午後5時半～6時半:第一講

「中金堂落慶一再建記念特別展示によせて」

興福寺境内管理室 次長 多川文彦

午後6時40分～7時・・・心を静める

午後7時～8時:第二講

連続講話・「奈良・祈り・心」 興福寺 貫首 多川俊映

会場:(学)文化学園 文化服装学院内

受講料:500円 先着200名

(JR 新宿駅南口、小田急線、京王線各新宿駅から 8 分、都営新宿線
新宿駅 3 分)

事 務 局

<投稿>< 函書の推薦 > を歓迎します。

< プリント版・郵送 >

メール版を編集してプリント版を月に 1 回発行郵送しています。

お申込みくださればお送りします。一応、実費として 1 月 3 5 0 円 (4 2 0 0
円/年) をいただいておりますが、強制するものではありません。

< 振込先 > 振込先：三井住友銀行「神田支店」 (普通) 7 8 7 1 5 3 2
(口座名) テンチシニアネットワーク

天地シニアネットワーク・テーブル・4 8 0 号

発行：2 0 1 8 年 1 0 月 1 日

天地シニアネットワーク事務局 (津田 孚人)

住所：〒1 1 6 - 0 0 0 1 荒川区町屋 3 - 2 -

1

ライオンズプラザ町屋 7 0 3

メールアドレス：tentisenior06@gmail.com

電話・FAX・0 3 - 3 8 1 9 - 7 6 5 1